View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

正岡子規漢詩研究
（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期　人文学専攻
学生番号：D131919
氏　　名：何　美娜

本論文は、正岡子規の漢詩について論じたものである。正岡子規は明治を代表する俳人であると同時に、すぐれた漢詩人でもある。子規は生涯に渡り二千首あまりの漢詩を作ったと言われている。「聞子規」という五言絶句は、満十二歳の子規がはじめて作った漢詩である。幼い頃から漢学に親しんだことは、彼のその後の文学活動において財産となったと考えられる。日本の短歌、俳句の歴史に清新な息吹をもたらした子規の文学的素地が養われたのは、彼の深い漢文、漢詩の素養があったからにほかならない。しかし、こうした子規文学の根本とも言える子規漢詩に関する研究はある程度は進んでいるが、まだ十分とは言えない。特に、中国における子規漢詩への研究はほぼ空白状態である。

以上のことを踏まえて、本論では、正岡子規の漢詩を取り上げ、子規の漢詩の特色、それに漢詩を通して見られる子規の心境と思想について論じる。本論では四章に分けて論じる。まず第 1 章の序論では、正岡子規の生涯と業績、漢詩創作の背景や環境などをまとめ、研究の動機と目的および先行研究に関して分析を行う。

第 2 章では、子規漢詩と中国古典との関連について考察する。全体を 5 節に分け、第 1 節では子規漢詩と陶淵明との関連について論じる。陶詩からの受容例を分析することによって、子規の陶淵明に対する認識はどのようなものなのかを明らかにする。子規は陶淵明の精神に敬服し、彼のような「不復與人談国家」（復た人と国家を談ぜず）という穏やかな隠居生活に憧れていたのは確かである。漢詩の中で自身のことを自ら陶淵明の諡号で呼んだことからも、子規の隠逸的な陶淵明に対する敬服ぶりが覗える。その一方、子規は陶淵明の胸中にある志に気づき、陶詩の表現を借用し、敢えて隠逸する意味を脱落させることで、陶淵明の心を、そして自身の心を訴えようと彼の作中で試みている。そのような子規の陶淵明像を本節では受容例を分析しながら考察を進めていく。

第 2 節では子規漢詩と杜甫との関連について述べる。唐代を代表する愛国詩人である杜甫は子規の憧れの一人であって、杜詩への傾倒は詩語や詩句だけではなく、詩形までも模倣しようとしていた。特に、従軍体験を得てからは、子規の杜甫の愛国詩への理解はより一層深まったようである。そのような子規の杜甫詩の受容形態と心境を具体的な受容例を挙げながら考察を加える。

第 3 節では李白詩への模倣について論じる。李白のような浪漫的な詩風を帯びている詩作は子規漢詩にもあることが明らかになる。子規は写実、写生とともに、李白のように理想、空想をも試みに作品の中に取り入れている。しかし、結局子規は写実という理論に至って李詩の飄逸な詩風を自分の作風に継承しなかった。その理由としては、まず明治時代の写実を重んじる宋詩風を推奨する時代背景がある。そのほか、李白詩風を継承することの難しさも考えられる。更には、子規の客観的な自然美を愛する性格も子規の写実的な作風を決めた一因とも言えよう。本節では受容例とともに子規の心境変化を見ていく。

第 4 節では子規漢詩と『荘子』の関連について論じる。子規漢詩の中には「蝶夢」、「大鵬」、「呼馬呼牛」など、『荘子』に出てくる道家思想を象徴する言葉が多く見られる。一見して道家と同じような思想を持っていると思われる子規は、漢詩の中では単に詩語を借用することにとどまっていて、道家の隠遁思想に憧れはあるものの、自然描写の方に重点を置いているように見受けられる。本節では、漢詩を具体的に分析しながら、子規の心境に迫る。

第 5 節では子規の絶命詩について考察を進める。この詩に関する作成時期や詩歌ジャンルなどについて分析を加えるほか、特に、中国の古典小説である『水滸伝』に出てくる魯智深という人物に子規自身のどのような心境を重ねたのか、そして、人生のほぼ最期に作られたこの漢詩に子規のどのような悟りと覚悟が潜んでいるのかについて論じる。以上の考察を通して子規の心境を解明できるほか、子規がいかに中国古典を受容したのか、また中国文化に対する子規の態度も覗えると考える。

以上の通り、第 2 章では子規漢詩の最大の特徴である中国古典との関わりについて論じる。しかし、子規漢詩の特徴はけっしてそれだけではないため、続いての第 3 章では中国古典との関連を注目しつつ、重点を子規漢詩のほかの特徴において、異なる角度から論考を進める。

本章は 5 節に分け、第 1 節では子規漢詩にある想像上の女性と現実にいる女性の形象を考察してみる。明治時代には、日本特有の家族制度があり、男系長子に譲られる戸主は家を率いるものとして大きな権利を持っていた。また、儒教思想の影響も大きく、極端な男尊女卑の考えも一般的であった。そのような

生育環境から見ると、子規も当然のこととして儒教本来の思想を持っているはずである。しかし、子規の漢詩を読むと、女性を劣等視し、蔑視するという一般的な理解だけでは、子規の女性に対する意識を見尽くせないことが分かる。漢詩を通して、子規の女性への深い思いやりという側面が見られる。子規漢詩の中に出てくる寂寞たる女性、怨恨深い女性、夫思いの女性、子供を持つ女性、情深い遊女、貧乏で勤勉たる女性、可憐な妹、献身的な母、そして、勉強熱心な女学生というさまざまな女性像を分析して、子規の新たな女性像を浮かびあがらせる。

第 2 節では漢詩創作において欠かせない平仄の問題について論じ、各詩形の代表的な詩作を取り上げ、子規の漢詩における平仄に対する知識の豊かさと型破りの漢詩の創作意図などについて解明する。子規漢詩は中国近体詩の諸規則に即って作られていることが押韻や平仄を点検することによって、実証できる。平仄の検証を通して、韻律上では子規の漢詩は完璧とは言えないが、実に様々な韻脚、文型を作品の中に取り入れている。技法も多数用いて、幅広く挑戦して、自らの技法を磨いていた痕跡が見られる。

第 3 節では子規漢詩の和習的な詩語に分析を加える。子規の漢詩の中には日本の地名や人名を数多く取り入れている。また、日本語の漢字や日本の風習、説話なども漢詩の中ではよく見られる。子規漢詩におけるこのような詩語は徂徠の「和習」に対する定義から見ると、もちろん和習に属する。しかし、日本で育った子規は日本特有の風習や地名などを漢詩の作品に取り入れることは当然である。本節ではこうした子規漢詩の内容に関わる和習的特色を詩語という側面から論じ、漢語についての子規における根本的な意識を解明する。

第 4 節では焦点を子規の題画詩に絞って論じる。子規の題画詩の特徴、そして、中国古典との関連が深い詩材について分析を行う。作品の中では人生観や価値観などを滅多に語らない子規であるが、雷公が描かれている絵を見て書いた題画詩の中で自分の金銭に対する考えを綴り込めている。さらに、ほとんど他人の絵について書かれた題画詩の中に、ただ一首しかない子規の自画山水に関する作品が見られる。これを分析することによって、当時の子規の画風、そして、絵画に対する考えなども解明できる。

第 5 節では子規の詠物詩を取り上げる。詠物詩は最初の時、詠じるその対象物をどれほど忠実に描写できるのかを優劣の標準としていた。しかし、時代の変化につれて、詠物詩は単純な写実から、その中に情をも読み込むようになる。本節では、子規の詠物詩に見える写実性、子規の機知、そして写実と感情の融合という三つの特徴を捉え、写実を主張する子規が詠物詩という漢詩ジャンルを扱う時にどのような手法と技法を用いているのかを明らかにしていく。

第 4 章は研究のまとめと今後の課題について述べる。資料として『正岡子規漢詩索引』と論文に関連する子規漢詩の注釈を附する。